



大きくなったらなんになる (山田小)

胸わくわくの入学式。新一年生は 小学校326名・中学校306名。

春。入学式のシーズンです。四月四日(水)、五日(木)と町内各小学校で入学式が行われました。六日(金)には中学校の入学式と保育所の入所式がありました。

小学校	男	女	計	昨年	増減
板井	10	11	21	12	9
木場	13	16	29	38	-9
黒鳥	9	7	16	20	-4
大野	62	62	124	128	-4
山田	44	43	87	85	2
立山	23	23	46	43	3
合計	161	162	323	326	-3
保育所	351	495	846	871	-25
合計	2104	2117	4221	4137	84

黒崎中	男	189	女	121	計	310
大野	男	32	女	43	計	75
興野	男	21	女	8	計	29
木場	男	17	女	10	計	27
善久	男	18	女	24	計	42
立山	男	14	女	11	計	25
寺地	男	10	女	11	計	21
山田	男	23	女	10	計	33
板井	男	9	女	17	計	26
合計	男	144	女	151	計	295
黒鳥園	男	3	女	8	計	11
合計	男	147	女	159	計	306

三世交代交流ゲート ボール大会

青年会議所主催
お年寄り、青年、子供の三世代のきずなを深めようと、日本青年会議所が主催する「三世交代交流全国ゲートボール大会」の黒崎町予選会が四月十五日(日)、鳥原本村運動広場で開かれました。当日は町内か



ゲートボールもシーズンイン

ら十チームが参加しました。チーム編成は十人、女性が二人以上、中学生以下が二人、男性は六十五歳以上というものが聞かれました。ゲームは午前九時からで、A、B二ブロックに分けて予選リーグを行い、各ブロックの上位二チームが決勝へ進出。決勝では興野チームが優勝、二位は金巻チーム。両チームは六月三日に新発田市で開かれる県大会へ出場することに決まっています。最近は大ブームのゲートボールですが、どちらかというとお年寄りのスポーツと思われがち。今大会はお年寄りに混じって子供や若者の笑い声が聞かれました。



四月十七日(火)、十八日(水)、県の健康増進指導者「やひこ号」が本町を訪問し、寺地、柳作、大野、小平方の四地区で料理講習会を開きました。四か所で百人ほどの主婦のかたが講習に参加しましたがこの講習、堅苦しいものではなく、屋外でちよつと味見の気分で見られるところがミソ。メニューは減塩をテーマにした青菜と豆腐のいため煮などでした。巻保健所と町保健衛生課からも栄養士が出張しバランスのとれた食事、肥満の防止法なども話しました。料理、お話ともに好評だったようです。



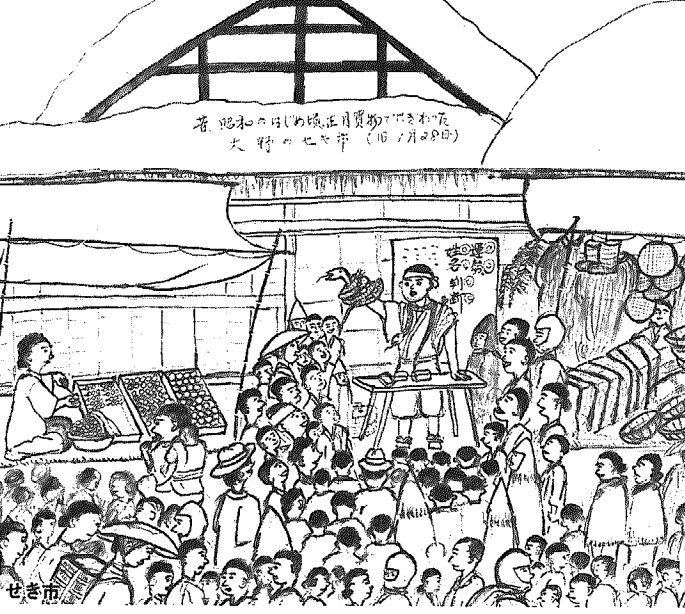
農業はこれからだ
第三回中核農家担い手推進委員研修会が三月十七日(土)総合体育館会議室で終了しました。同日の最後の研修会では、浅妻町長、黒崎町農協の池参事、戸枝農業委員長、白根農業改良普及所長の四氏が講演しました。この研修会というのは、農業の活性化を図り、参加者に本町農業の中心的担い手になってもらおうと、年六回開いているものです。昨年度は町内各地区から二十名が参加し、先進地視察、農業技術、法律、資金経営などを勉強しました。

黒崎町の 今昔

風習行事：その五 一月三十一日の大晦日の晩に 家族全員で一つ歳をとった。

針供養 一月八日
辞書に針供養は二月八日と十二月八日に婦人が裁縫を休むこと、折れた針を集めて豆腐に刺し、淡島神社に納める地方もあると記されている。時代の移り変わりとともに、近年町では和服を着用する機会がだんだん少なくなってきた。一時は十数軒を数えた和裁組合も今ではわずか数軒である。この懐かしい風習も忘れさられようとしている。昔、諏訪町で仕立物を教えていた横木トクさんに当時の針供養の思い出を聞いてみた。

横木さんはそのころ十五歳ぐらいから二十歳ぐらいまでのお弟子さんが二十人ほどいた。針供養の日には朝から裁縫を休み、仕立盤や裁縫類をきれいに掃除し、仕立盤の上で豆腐に折れた針をさして神様にまつた。それから、みんなの出し合いでお菓子やみかんを買って唄や踊りで楽しい一日をすごしたという。一般の家庭でもおはぎやごもくご飯などで祝ったものである。大晦日もあとわずかに迫った二十八日のせき市には、黒崎はもとより他市町村から常にも増してたくさん売物店が出た。昔の市は今と違って町のメイン道路(旧国道8号線)の二之町から仲町、下町へかけて開かれた。旧正月であったので一月二十八日がせき市だったが、もう雪のあることが多かった。町の人たちがまだ寝ている暗いうちから、野菜をソリに



積んだり、馬かごで背負ったり、運送店のトラックを何人かでチャーターして荷物を運んできた。とにかく一般に車がまだなかったもので、なかなかたいへんであったろう。市が始まると、町や近郊の農家から正月用の買物物をしょうとくり出した人達で、市場の通りは歩けないほど混雑した。当時小さかったわたしも友達とよく市を見に行つた。人ごみをかきわけくぐり抜けながら出店を見て回つた。日本刀を持った大道芸人が、渋い口上で「サアサアお立合い、御用とお急ぎのない方はゆくり聞いていらつしやい」と客を寄せていた。ガマの油売りや大きな蛇を首に巻きつけた古い師や薬売りなどがいた。今の市場とは比べものにならないほど活気があった。餅つき 一月二十九日、三十日餅つきの日は一応定まっているが、だいたい二十九日か三十日に行われた。縁起をかついで二十九日は「苦をつく」といつてさける人もあったがまた逆に「二九」を「福」とも読み縁起が良いといつて、この日につく人も多かった。昔は餅やだんごは食物の司(くいものつかさ)といわれ、当時の人々にとつて最高のごちそうであった。

若い人たちは「年の数ほど餅を食べられなければいっちょう前といわれなかつた」ので、二十歳つも食べる者も多かった。だから、家族の多い家では一軒で十うす(六十キロ以上)以上もついた。この餅つきのとき作る「かた餅」や「あられ」が子供たちの最高のおやつだった。豆やごまを入れ薄く切られたかた餅を一枚づつ細繩にはさんで台所か、廊下のあたりにぶら下げて乾かした。乾燥したら網わたして焼いて食べるとカリカリしておいしかったものである。

一月三十一日は年とりの日である。朝から神棚や仏壇のすずを払つた。神棚にシメ縄を張り、鏡餅を供え松やさかき、豆木がらなどを飾つた。仏前にも鏡餅を供え年とりの準備が終わる。大野ではこの大晦日のことを昔から歳夜と呼んでいる。その晩は年一回のおいしいごちそうが食べられた。ごちそうといつても今と違って、その季節のものしかなかったししょっぱい塩引きの切り身におしびら(さと芋、油揚げ、人参、十菜、ねぎ、コンニャクなどを煮たもの)とかまぼこぐらいたった。

それでも、当時としてはいちばんのごちそうであった。刺身などは庶民の口には入らなかった。昔は今のようには万年齢で呼ばず、一般に「呼びどし」で勘定をしていた。だから大晦日の晩を「歳夜(としや)」ともいつて、その晩の夕食を食べると、誕生日が来なくともみんなが歳をとった。歳夜に他家の人と話すとき、「おめんとこも歳とつたかねエ」「おらちはこれからだてエ」などと言つていたものである。また、このころ大野より一か月早く正月を迎える新潟の親戚へ十二月三十一日の晩、町の人たちはよく歳とりに行つたものだ。歳とり(夕食)はたいいていの家では、茶の間のいろりを囲んでみんなのお膳を並べ、いろりにはたき火が赤々と燃やされていた。そして、家長が御先祖や大神宮様にお参りした後、わたしたちもお参りしてから歳夜のごちそうを食べた。今号で風習行事を終了しますが、大野を中心にして執筆しましたが、今後は各地区も取材していきたいと思つています。ご愛読ありがとうございます。